

ワケ カタチには理由がある(34)

Shape follows Function & Taste

～三菱局地戦闘機雷電(丁2173)



〔同じく堀越二郎設計の零式戦闘機と：操縦席がとても広いことがよくわかる→〕

本機は、日本海軍が局地戦闘機、つまりインターセプターとして開発を命じた単発戦闘機で、1942年

に初飛行しています。堀越二郎が設計した機体ですが、大馬力ながら大型の火星エンジンを採用したため、空気抵抗を小さくするために機首を絞り、プロペラまでを延長軸で繋ぐというアイデアを採用しました。しかし、この延長軸とプロペラの相性が悪かったのか、悪性の振動が生じ、この解決に時間を費やすこととなります。この回り道が、結果として次期艦上戦闘機である烈風の登場を遅らせることにもなりました。雷電は600機強が生産され、首都防衛の要、厚木飛行場の302航空隊は、月光とともにこの機体を使用してB-29の迎撃に当たりました。なお、上記理由により胴体が極めて太くなって零戦などに比べるとコクピットが不必要に広くなったため、古参の操縦者たちは「宴会が開けるほど」と皮肉っていたそうです(「零戦開発物語」小福田皓文著 光人社NF文庫)。

【模型について】

チェコのSWORD製1/72のインジェクションキットです。このメーカー、チェコでありながら、流星、彩雲など多くの日本機を1/72でリリースしてくれており、1/72ファンはたいへんありがたいメーカーです。なお、この機体を製作した一つの理由は、胴体側面に描かれた日の丸が、前方から見ていかにゆがむかを立体で検証したかったからですが、写真の通り「大リーグボール」並みに(古!w)、ひしゃげることがわかりました。(中川裕幸 2021年7月, 2023年5月改定)